

## 眞の師弟道

「親鸞は弟子一人ももたず候」

近頃私はこの御言の前に立つて考えさせられている。心の底に食ひ入り、私の愚なすがたを照出して下さって、今更に名利の心の底なきを思うことである。「親鸞は弟子一人ももたず候」、何という澄みわたった明鏡であろう。人の師匠らしきすがたをした三十年の、否久遠劫来の我執我慢の私のすがたを照出して下さる浄破璃の鏡である。

「その故は、わが計にてひとに念仏をまをさせ候わばこそ弟子にても候はめ、ひとえに弥陀の御催にあづかりて念仏まおし候う人を『わが弟子』とまおすこと極めたる荒涼のことなり。」何という鋭いみ光であろう。極めたる荒涼、荒涼とは「あれはててもものすごいこと」である。

これについて香月院は講林記の中に「荒ノ字ハアレト云フ字ナリ。涼ハゾツトモノスゴキ意ナリ。カノ諸寺諸山ノ人ノ住マヌ坊ヘ入ルトゾツトスルコトアリ。詩二月荒涼トツカフトキハ荒果テタル処二月ノミスミワタツテアルヲミルトゾツトスル処ヲ荒涼ト云フ。コレガ字義ノ当リ前ナリ。シカルヲ日本ノ俗語ニ用フルトキハ義ヲ転ジテ遠キ慮リモナク斟酌モナキコトニ用フ。コレハ云何ト云フニ荒レ果ツルト云フハモノヲカマハヌ事ナリ。タトヘバ座敷ノ縁ガ落ツルトモ天井ニ雨ガ漏ラウトモコレヲ少シモカマハヌ処ニ入ツテミルト荒レ果テテ居ルユヘニ遠慮モナクカマハヌ処ヲ荒涼トイフ。コレハ支那ノ文章ヲ義ヲ転ジテ用フ。シカレバ日本ノ文章ニ用フルトキハ遠慮モナク斟酌モナキ事ト解スベシ。」といわれた。

自分の力で人に念仏させたように思うてわが弟子ということは極めたる荒涼のことであるとは、遠き慮のないことである。そうであろうが私は荒涼のまままで頂かう。鋭くひびくことである。自分の弟子ひとの弟子という世界は誠に荒涼たることである。たとひ百年説いても弥陀の御催しでなければ、又その人の宿善がなかつたら、御念仏の人になつてもろうことは出来ないのである。何で自分に功があるう。そこには寸分の言葉をはさむ余地はない。

聖人のこの仰せをいたゞいてをると、何だか広い世界に出して頂き、ことのはか御念仏の御同朋にお会いすることになつかしみと喜びを感じさせて頂くことである。皆如来の子なのである。仏子であり、仏弟子である。この「親鸞は弟子一人ももたず候」のみ言の前に合掌すると、私は相すまない心の相を見せて頂くのにかかわらず、広い世界につれ出され、今更の如くこの世に生れ出で多くの御念仏の同朋を御意み下さったことに対してつきぬ感謝の思いで胸が一ぱいになる。今朝も仏参の時に「常にこの人（念仏の人）はこれ人中の分陀利華なりとするべしとなり。これは如来のみに分陀利華を念仏の人に譬えたまへるなり。この華は人中の上々華なり好華なり、妙好華なり、希有華なり、最勝華なりとはめたまへり。光明寺の和尚の御釈には念仏のひとをば上々人・好人・妙好人・希有人・最勝人とはめたまへり。」（一念多念

証文)との仰せを頂いた。このみ言の通りに何もものにもかえられぬ尊い華は念仏の御同胞である。この尊い華が無かつたら、人生は荒涼たる大沙漠であろう。何時でも何処でもこの上々華にとりかこまれて生かされる私の幸、この有難さ嬉しさを何にたとへよう。何でこれが「我がはからい」であろう。この何ものにもかえがたい花園の幸を思えば思うほど、如来の御力を感じさせて頂くことである。

「つくべき縁あれば伴ひ、はなるべき縁あれば離るることのある……」

深い智慧から出たみ言である。親子さへ兄弟さへどうすることも出来ないのが因縁である。縁あるものを裂かうとしたり、縁のないものを結ぼうとしたりして苦しんでいるのが、愚痴の凡夫である。保証人を入れた固い約束も、血判も、誓いも皆駄目、因縁の前には皆駄目である。離合集散は皆因縁による。さびしいけれども、来る人を迎へ、去る人を送つて念仏させて頂く。人を捕えず人に捕えられず因縁のままにとりはなして合掌させて頂く時、五年も十年も二十年も一緒に念仏させて頂く因縁がことさらに有難く感ぜられるではないか。

「師を背きて人につれて念仏すれば往生すべからざるものなりなんどいうこと不可説なり。如来より賜りたる信心をわがものがはにとりかへさんとまをすにや、かへすぐもあるべからざることなり」

不可説とは、ことばもつきたこと、言語道断なことをいうことである。この厳しい御誠めは更に更に私を深い深い内省につれてゆく。如来より賜りたる信心をわがものがはにする。おそれ入ります南無阿弥陀仏。私の正体を照破されて余りがない。だが然しどうしたことだろう。み言は私を墮地獄の悪人と照出しつゝ、私を超責任無<sup>2</sup>責任、私をして一塵の荷物のない世界に出して下さつてあるではないか。如来より賜うたものを賛嘆せぬにいられようか。いなそれより先に、如来聖人の徳音を聞かずにいられようか。私のものは何もありません。何もありません。唯無限に頂きました。無限に頂きつゝあります。

「自然の理にあひかなはば仏恩をも知り、また師の恩を知るべきなり」

又しても恩を忘れる私の前に、仏恩祖恩に感泣報謝する有難い御同胞の尊い御すがたが浮んで来る。同行善知識とはよくいわれたものである。御同胞が又してもまたしても私を泣かせ合掌せしめ念仏させて下さる。仏恩なるかな。祖恩なるかな。御同胞の御恩なるかな。いよく「親・鸞は弟子一人ももたず候」のみ言がひびきわたつて来ることではある。(二三、一、九)